# 福井・織物王国のあゆみ①羽二重編

奥山秀範（産業考古学会評議員）

| 福井の織物関連の動き | 関　連　資　料 |
|---|---|

## *羽二重前史*

幕末にはすでに福井藩も奉書紬など絹織物業の振興をはかっていた。慶応 3 年には福井藩は佐々木権六を米国に派遣し織機 2 台持購入した記録も残っている。明治 4 年に岩倉使節団に参加していた由利公正がヨーロッパより数種類の絹織物を持ち帰り、旧福井藩士の酒井功にこれを見せ、一層の奮闘を呼びかけたことから本県の絹織物の改良発達が始まる。

いち早く機業に取組んだ緑川祐之進は、明治 6 年ウイーン万博、明治 9 年フィラデルフィア博覧会に奉書紬を出品し褒賞状やメダルを授与されている。

この頃、京都府では東京遷都で疲弊した京の経済・西陣の復興をはかるため、フランスに佐倉常七など三名の伝習生をフランス（リヨン）派遣する。苦難の修行の後、ジャカードとバッタン機を購入し日本へ持ち帰り、明治 7 年 4 月の京都博覧会で公開した。また翌 8 年 1 月には府は織工場を開設し、佐倉を教師にしてこれらの織機の使用法を一般に教授した。これを見た酒井功は敦賀県（当時は福井県ではない）勧業課に京都への伝習生派遣を請願する。

敦賀県の勧業課には、同じ福井藩士出身で幕末のは物産総会所勤めの経験を有する伊藤真が在籍していたこともあり、細井ジュンらの県費による伝修生派遣が実現する。また翌 9 年 7 月には伊藤真は、米国留学から戻った山岡次郎（元福井藩士）から染色技術の重要性の復命を受けて、元福井藩士村野文次郎を染色伝習生として京都の染殿に派遣、またバッタン機 2 台の県費購入も実現させる。

ところが、9 年 8 月に敦賀県が消滅し、石川県に組み入れられたことにより、福井での絹織物業の振興は、以降、旧士族を中心とする民間人の手に委ねられることとなった。

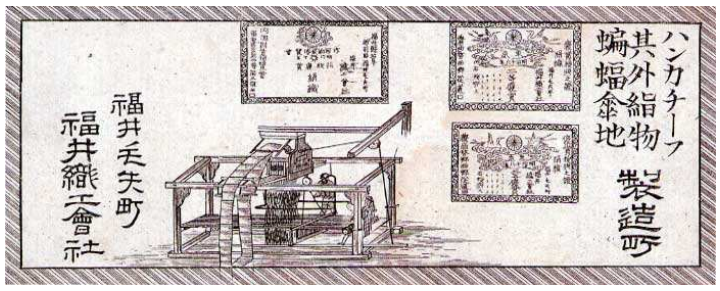
このため、酒井や村野近良（文次郎の義父）らの士族一四人が出資して、毛矢町に「織工会社」（社長村野近良）を興し、10 年 4 月開業にこぎつける。

しかし、製織技術はいまだ未熟で、販路の開拓も困難を極め分裂に追い込まれる。

福井の復権を目指す旧福井藩士族は、家老や上級武士が中心となり、本県では最大規模、北陸で 2 番目の大型銀行である九十二銀行（頭取狛元）を明治 11 年 10 月に設立、また明治 13 年 2 月、石川県でも商工会議所設立の機運がもりあがると、伊藤真らは金沢での準備会に参加、明治 13 年 4 月、金沢に先立ち福井商法会議所を創設（事務局第九十二国立銀行内）、その後の福井の産業起こし、まちおこしを推進していた。

**酒井功**（旧福井藩士）

本県機業の開拓者。明治 4 年に由利公正がヨーロッパより持ち帰った絹織物を見、この改良発達に全力をあげる。敦賀県勧業課に京都への織物伝習生派遣を請願し、県費による派遣が実現する。またバッタン機 2 台の県費購入も実現させる。明治 10 年 4 月には士族 14 人と毛矢町に「織工会社」を興し、製織技術の改良に努めた。




**佐倉常七**

西陣の織匠。明治 5 年 11 月京都府の伝習生としてフランスのリヨンに派遣され、翌 6 年ジャガード・バッタンなどの洋式織機を携え帰国。明治 7 年京都博覧会で初運転、実演を行う。後、京都府の織工場や染織学校教授となり、新織法の普及につとめた。本県の細井ジュンにバッタンの使用法を教えたのも彼である。（リヨンでの記念写真、右端が佐倉）

**伊藤真**（旧福井藩士）

廃藩置県後も官吏をつとめながら、福井の殖産振興に務め、敦賀県時代には勧業掛とし織物伝習生や染色伝習生の京都派遣に重要な役割を果たす。官吏退任後、第九十二国立銀行や福井商法会議所を創設、さらに福井新聞（第一次福井新聞）を創刊し、明治前期福井経済界をリードした。（写真は福井商法会議所発祥の地）

**細井ジュン**（福井の織姫といわれた）

敦賀県庁が京都への織物伝習生の派遣を決定した時、その伝習生に選ばれる。福井に戻ってからは、毛矢町「織工会社」に技師として参加、後の本県羽二重機業そして繊維産業発展に貢献した。

**山岡次郎**（元福井藩士）

日本の繊維工業（染織）の父ともいうべき事績を残した明治の化学者、技官。福井藩留学生として米国で化学を修め、帰

## *福井羽二重の誕生と興隆*

明治 10 年代後半に入ると、わが国でも急速に近代工業が発展しはじめ、桐生・足利では羽二重が米国へ輸出されはじめ、羽二重の需要が高まる。そのようななか、福井や粟田部の仲買商から羽二重輸出好況の情報が福井にもたらされるとともに、明治 19 年頃には福井にも羽二重の注文が来るようになった。

しかし、当時の福井には羽二重製織の技術は無く、このため、福井でも新技術導入の機運が起き、技術教師の選定が課題となり、業界はこの人選を村野文次郎に依頼した。

村野は恩師山岡次郎に相談し、桐生の森山芳平を紹介され、森山芳平工場の織物技術者高力直寛の招聘が決まる。翌 20 年 3 月に高力は来福し「織工会社」で羽二重講習会が行われ、これが「羽二重王国福井」誕生のきっかけとなった。

ちなみに、絹織物産額の全国府県順位をみると、明治 20 年には第 14 位で産額の全国に占めるシェアも 1.2%にすぎなかったが、明治 25 年には第 3 位、15.4%と急伸している。

その後、福井の士族や商人を中心に機業を経営する者が増大する中、市内各機業場には伝習所が設けられ、織工たちは仕事に就きながら技術の習得に努めた。さらに明治 23 年頃からは勝山、粟田部、丸岡、鯖江など町部を中心に、福井へ伝習生を派遣したり、福井の織工を教師として招くなどして羽二重の製織が試みられた。

以後、羽二重機業は、小規模な資金を調達可能な旧士族、商工業者、小地主などを担い手として、若干名の織工を雇用する零細な事業者として、県内各地にひろがっていった。

国後は大学などで教鞭をとっていたが、殖産興業に向けて技術者教育の必要性、職工養成の必要性を痛感し、東京職工学校（現東京工業大学）、足利織物講習所をはじめ次々と染織学校を創設。
さらには明治の大工場「日本織物会社」の創設を手伝い、晩年は再び官吏に戻り織物の輸出と品質改良に努めた。

全国でも初めての機械制大工場だった日本織物株式会社、位置は現在の産業文化会館、市役所一帯にあった

**森山芳平**

桐生の機業家。早くから織物や染色改良に取り組み、十七年には農商務省技師山岡次郎を桐生に招いて染色法の改良に努めた。
桐生織物の名を高める一方、自身または弟子を各地に派遣して技術指導を行った。高弟高力直寛の福井派遣・羽二重講習はあまりにも有名で「羽二重王国福井」の生みの親となった。

森山工場跡

## *福井羽二重誕生で主役を演じた二人*

**村野文次郎**（旧福井藩士）

羽二重王国・福井の先覚者で、自ら先進地の技術を福井に導入し、機業家としても成功した有力な業界人である。織物福井の第一歩は、明治 9 年の伝習生派遣に始まる。村野は洋式染色法研究のため京都府立染色伝習所へ派遣され、山岡の盟友中村喜一郎に師事、その後東京大学で化学や染色を講義していた山岡次郎に師事、帰福後、その技術普及に努めた。

山岡の紹介で、桐生の著名な織物事業家森山芳平と交渉し、高力直寛の福井招請を実現し、羽二重織物の興隆の基礎を築いた。

**高力直寛**　（旧松山藩士）

明治の第一級織物技術者。羽前松山藩に生まれ、後、桐生に移り森山芳平に師事。その才が認められ、西陣の佐倉常七のもとで、ジャカード織物の習得、さらに森山の指示で、福井に赴き羽二重織を無償で講習。これが羽二重王国福井誕生のきっかけとなった。後年、教育界に転じ東京高等工業学校（現東京工業大学）の教授として後進の育成にあたった他、織物技術の審査員なども努めた。

▼ **絹織物産額の上位５府県**

| | 明治 20<br>1887 年 | | 明治 25<br>1892 年 | | 明治 30<br>1897 年 | | 明治 35<br>1902 年 | | 明治 40<br>1907 年 | | 大正元年<br>1912 年 | | 大正 6 年<br>1917 年 | | 大正 11 年<br>1922 年 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 位 | 京都 | 3,678 | 京都 | 5,583 | 京都 | 15,724 | 京都 | 18,498 | 京都 | 18,390 | **福井** | 21,829 | **福井** | 48,666 | **福井** | 74,144 |
| 2 位 | 群馬 | 1,320 | 群馬 | 3,006 | 群馬 | 10,624 | **福井** | 12,440 | **福井** | 17,488 | 京都 | 20,692 | 京都 | 36,634 | 京都 | 65,38 |
| 3 位 | 山梨 | 1,212 | **福井** | 2,984 | **福井** | 8,059 | 群馬 | 7,811 | 石川 | 12,654 | 群馬 | 12,297 | 石川 | 26,121 | 群馬 | 53,128 |
| 4 位 | 神奈川 | 479 | 山梨 | 915 | 栃木 | 4,545 | 石川 | 6,299 | 群馬 | 9,129 | 石川 | 11,933 | 群馬 | 20,518 | 石川 | 42,422 |
| 5 位 | 新潟 | 455 | 石川 | 902 | 東京 | 4,017 | 福島 | 2,965 | 新潟 | 5,155 | 東京 | 9,317 | 東京 | 11,630 | 東京 | 32,045 |

単位：千円　（出展「福井県史」）

## 福井の織物関連の動き

### *織物振興と金融（銀行）*

羽二重勃興期の織物金融は、地元士族の出資経営する第九十二国立銀行（前期は副支配人伊藤真、中期は石田磊頭取）が担った。同行は、横浜から荷為替付で移送されてきた生糸を行内の倉庫に保管し、荷為替の取立と引替えに生糸商に生糸を引き渡したが、このさい、代金未済の生糸を担保に貸し出すなどの生糸商に対する金融の便宜を図った。また、羽二重の集散地への移送のさいには羽二重商の注文に応じて荷為替の取組みを行った。

織物発展に九十二銀行の果した役割は少なくない。

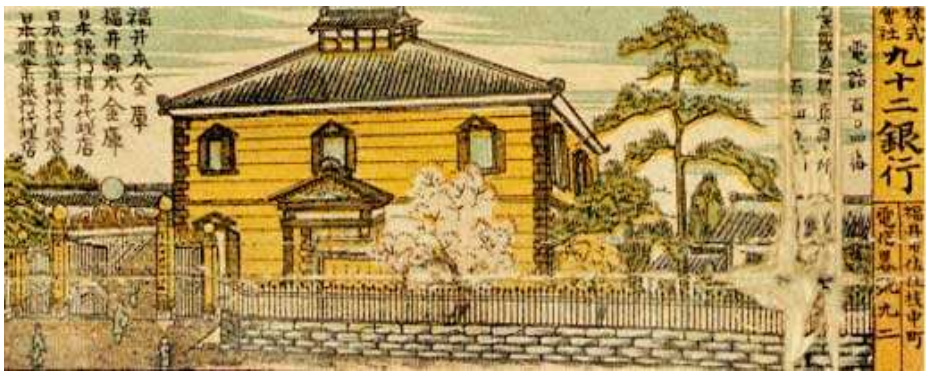
第九十二国立銀行の頭取石田磊（旧福井藩士）は、郷土の盟友ともいうべき伊藤真から福井経済の後事を託され、明治 23 年福井に戻り、11 月 1 日伊藤に代わり福井第九十二国立銀行の支配人（後に頭取）に就任、銀行家の道を歩き始める。市会議長や福井商業会議所会頭としても幅広く活躍、政財界人の重鎮として役職も多く兼ねていた。

しかし明治 33 年の恐慌で資本の殆どを減耗し、事実上の破綻状態（営業はその後もしばらく継続）となり、大阪に本店を有する百三十銀行（後の富士銀行）、金沢発祥で富山に本店を有する十二銀行（後の北陸銀行）といった県外銀行の福井支店がその後の織物金融を担っていく。

県内の地主層により設立された福井銀行は第一次大戦の好況期以降織物金融で業績を伸ばしていく。

## 関　連　資　料

▼**九十二銀行**『福井県実業家案内すご録』



**石田磊**（九十二銀行頭取）

明治三十年代から四十年代にかけて、福井商業会議所の会頭を勤めたほか、5 年にわたって福井市会議長を勤めるなど、明治後期、福井の行政をはじめ政治、経済と多方面に業績を残した明治人である。他の主な役職として福井農工銀行取締役、福井預金銀行監査役、福井商品保険株式会社専務、福井生糸株式会社取締役、福井絹織物輸出株式会社相談役、福井絹糸株式会社取締役、福井生糸羽二重倉庫株式会社取締役などがあった。

活動の中心は福井金融界の覇王と言われた九十二銀行の頭取職で、伊藤以来の殖産興業の志を棄てることなく、織物金融など機業家や商人への事実上の無担保による積極融資に応じてきた。このため、33 年の生糸暴落・恐慌の影響をもろに受けることとなり、経営に深刻な影響を与えた。

しかし、この危機は石田頭取の個人的信用で、何とか乗り切ってきたもの明治 40 年病に倒れ、経営を見ることができなくなると、残った経営陣で銀行業務の継続は難しく、直ちに 経営危機が表面化し、11 月に休業、破綻に追い込まれた。